様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１２３

研究課題名（和文）コッラード・ヴィーニの公共彫刻－政治史的・文化史的解読とカタログ・レゾネ作成

研究課題名（英文）The Public Sculpture of Corrado Vigni -A Political and Cultural Interpretation with Catalogne raisonne

研究代表者
甲斐　教行（Kai, Noriyuki）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：６０３２３１９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ファシズム期イタリア各地の公共彫刻を数多く制作したフィレンツェ出身の彫刻家コッラード・ヴィーニ（1888-1956年）の郵政庁舎・聖堂・噴水・墓地その他公共建築を飾る作品群のカタログ・レゾネ作成を主眼とし、平成28年度、『五浦論叢』第23号にその成果を掲載した。また同カタログのイタリア語版を同誌第24号に投稿中である。研究の過程で、中部イタリアの保養地モンテカティーニ・テルメのテットゥッチョ浴場ファサードを飾る四体の女性擬人像と、同じく中部イタリア・テルニの大聖堂ファサードを飾る八体の聖人像と大聖堂広場の噴水彫刻の図像を検討し、平成27年度に『五浦論叢』第22号に掲載した。

研究成果の概要（英文）：Corrado Vigni (1888-1956), florentine sculptor, worked for many public buildings in the Fascist era in Italy. I published the catalogue raisonne of his public sculptures on "The Izura Bulletin", vol.23 in 2016, and contribute its Italian version on the same periodical, vol.24, 2017. I also studied, from the iconographic standpoint, four female allegorical statues for the Tettuccio Bathhouse at Montecatini Terme, eight statues of saints for the Terni Cathedral, and the fountain statue group of the Terni Cathedral Plaza, with related gesso studies here pubblished for the first time, on "The Izura Bulletin", vol.22, 2016.

研究分野：西洋美術史

キーワード：彫刻　イタリア　ファシズム　フィレンツェ　テルニ　モンテカティーニ・テルメ

１．研究開始当初の背景

20 世紀イタリアで活躍したフィレンツェ出身の彫刻家コッラード・ヴィーニ（1888-1956 年）は、1920 年代から 50 年代にかけて、イタリア中の数多くの公共建築の装飾に携わった。ヴィーニへの批評家の注目は 1933 年に《座る女》（カッラーラ、アカデミア）で全国彫刻コンクール国王賞を受賞後特に高まり、とりわけイタロ・タヴォラート（I. Tavolato, *Scultura di Corrado Vigni*, Milano 1934）は、ヴィーニが他のいかなる彫刻家とも異なる独創的な存在であると認め、「理性と知性に支えられたイタリアの人文主義、表現と形態のトスカーナ的純粋性である」と極めて高い評価を与えている。

しかしファシズム政体と分かちがたく結びついたこの時期の具象彫刻家の多くがそうであったように、戦後はごく近年まで本格的なヴィーニ研究がなされなかった。ようやく 2002 年にシリガッティによって、フィレンツェの電力会社のために 1933 年頃制作された三点の擬人像が当時の女性擬人像流行の文脈に位置づけられたものの（C. Sirigatti, *Dee in pullover*, “Artista”, 2002, pp.60-77）、いまだヴィーニの全作品を総合的に論じたモノグラフは現れていなかった。それは政治と芸術が複雑に絡み合ったこの困難な時期と対決する精神的・物理的準備が整っていなかったためでもある。

申請者は、トスカーナ州フィレンツェとムジェッロの個人邸が所蔵する総計 18 点の未発表習作を撮影・検討する機会に恵まれたことから、ヴィーニの体系的研究を志す直接的な動機を得た。平成 22 年度には茨城大学五浦美術文化研究所所員プロジェクト助成金を取得して研究に着手し、ヴィーニが晩年に毎夏定期的に訪れていた弟子の私邸に遺されたジェッソ・レリーフのうち６点が、イタリア北部アルト・アディジェ州ボルツァーノの「勝利の広場」（Piazza della Vittoria）を囲む全国社会保障機構会館の正面を飾るレリーフの習作であり、またジェッソ像２点が、イタリア中部ラツィオ州サバウディアのサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂内の礼拝堂を飾る大理石像《われは主のはしため》の習作であることなどを究明し、『五浦論叢』にイタリア語と日本語の並記により発表した（Noriyuki Kai, *Bozzetti inediti di Corrado Vigni, per Sabaudia e Bolzano*, 『五浦論叢』（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）第 17 号、2010 年、pp. (1)-(26)）。

また調査の過程で、フィレンツェの他の三つの個人邸に計数十点のヴィーニの習作を発見し、その中にモンテカティーニ・テルメ、テットゥッチョ浴場ファサード上の女性擬人像、テルニ大聖堂ファサード上の聖人像、ラグーサ郵政電信庁舎ファサード上の女性擬人像等の習作を確認した。このため、すでにボルツァーノとサバウディアの諸作で実施したような完成作と習作の同時公刊と分析の手法を他の公共彫刻にも実施していくことが可能と推測された。

そこで申請者は平成 22 年度から 24 年度まで、文部科学省科学研究費助成（基盤研究（C））を取得し、研究を続行した結果、ヴィーニと親交の深かったフィレンツェのホテル・バリオーニの経営者フランチェスコ・バリオーニが依頼した同ホテル開業 25 周年記念メダル《ケレス》を、彫刻家が信奉する進歩史観の観点から、文明の寓意と解釈することができた。さらに、《ケレス》と、北米の墓地のための《キリスト磔刑》のための個人蔵習作を初公刊できた。これらの成果はイタリアの美術史学専門誌『Artista』に発表した（Noriyuki Kai, *Corrado Vigni e l’intelligenza umana*, “Artista”, 2010, pp.142-149, 2011 年 11 月刊）。また前記ラグーサ郵政電信庁舎ファサード上の女性擬人像等の習作を初公刊するとともに、その主題を同庁舎設計者アンジェロ・マッツォーニが残した文書に基づき初めて特定し、図像分析を行った。その成果は『五浦論叢』にイタリア語要旨を付して発表した（甲斐教行「コッラード・ヴィーニ作ラグーサ郵政電信庁舎寓意像小論」、『五浦論叢』（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）第 20 号、2013 年、pp.1-36）。しかしモンテカティーニ・テルメ及びテルニの諸作については調査が及ばなかった。またヴィーニの公共彫刻全作品の体系的調査を成果物として発表するには至らなかった。今回の申請と研究はこのような背景のもとでなされていった。

２．研究の目的

本研究は、コッラード・ヴィーニの公共彫刻の図像を分析し、政治的・文化的メッセージがいかに表象化されたかを解明しつつ、その全作品を年代順にカタログ化することを主要な目的とする。その前提として、1920 年代から 50 年代に至るヴィーニの公共彫刻全作品および個人邸所蔵の習作群の実地調査が必須となる。

本研究は従来包括的な研究が少なかったファシズム期公共彫刻の図像解釈を行うことで、この時期の政治・文化・芸術の交錯を具体的に解明しうるばかりでなく、大戦間のイタリア具象彫刻再評価の流れに貢献する可能性がある。その結果、従来のアヴァンギャルド中心のイタリア彫刻史観を是正し、多様なイタリア 20 世紀美術の全貌の理解に一石を投じることになろう。そこに本研究の主要な特色と意義があるが、それに加え、彫刻家ヴィーニ個人に関するモノグラフ的研究という観点からも、ヴィーニの全公共彫刻のカタログ化という世界初となる資料の作成によって、多くの新知見をもたらすことが期待される。以上が本研究の目的である。

３．研究の方法

夏期（7月末～9月前半）を中心に、必要に応じゴールデン・ウィーク期（4月末～5月初

旬）または春期（3月下旬）等にも実施するイタリアでの資料収集・実地調査・作品撮影と国内における資料解読・分析を主たる研究方法とする。

実地調査・撮影については、ボディオ・ロムナーゴ、ミラノ、ブレッシャ、ピアチェンツァ、ボルツァーノ、ヴェローナ、フィレンツェ、モンテカティーニ・テルメ、カステルフランコ・ディ・ソット、テルニ、ローマ、サバウディア、ナポリ、ラグーサに現存する公共彫刻群と、記録史料により存在したことが明らかな公共彫刻群が対象となる。ヴィーニの公共彫刻のうち、現存する全作品を実地調査・撮影するとともに、できるだけ多くの作品の寸法や素材の確認、図像の精査等のため、頻繁に作品に立ち帰る必要がある。特にフィレンツェの二つの個人邸はラグーサ、テルニ、モンテカティーニ・テルメの諸作の習作を所蔵しているため、頻繁に所有者と交渉を重ね、調査を継続することになった。

次に作品の年代確認と、年代が不確定な作品についてはそれが確定された作品との比較考察によっておおよその年代を推定し、制作年代と対応する文化的・政治的事象を踏まえた図像解釈に取り組むことになる。これら作品の年代は、フィレンツェの美術史研究所（Kunsthistorisches Institut in Florenz）およびハーヴァード大学付属ベレンソン研究所（Villa I Tatti）における美術史文献調査によって、個々の所蔵先の情報を深めた。20世紀前半の政治・思想状況の把握に際しては、フィレンツェ国立中央図書館（Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze）等を利用した。また存命中のヴィーニの弟子たち、画家フィオレンツォ・コペルティーニ氏への面会及び書簡での取材、彫刻家ヴィットーリオ・オッタネッリ氏との面会取材を継続した。

研究成果の『五浦論叢』への掲載に際しては、イタリア語版の作成でフィレンツェ在住の美術史家ルチア・マンニーニ氏に校閲協力を頂いた。

４．研究成果

（１）トスカーナ州モンテカティーニ・テルメの温泉の効能は古代ローマ時代から知られるが、1370 年に水源のひとつが屋根（tettoia）で覆われたことから、この浴場はテットゥッチョ（Tettuccio）の名で呼ばれるようになった。フィレンツェの建築家・技師ウーゴ・ジョヴァンノッツィ（1876-1957 年）は 1916 年に温泉場の全施設の設計案と都市計画案を委ねられたが、同年の設計案は第一次世界大戦のため実施されなかった。今日われわれが確認できるのは 1918 年に発表された修正案だが、ファサードのアーキトレーヴ上に四体の女性寓意像を配する計画がすでに見て取れる。テットゥッチョ浴場は 1923-27 年に建造され、1928 年に公式に除幕された。ヴィーニの四体の彫像はテットゥッチョ浴場が完成した 1928 年 6 月の『技術者（ヴンジェーレ）』誌掲載の写真に現在と同じ順序で並んでいる。

ヴィーニの女性寓意像は、テットゥッチョ浴場入口の左右に配された計四本の円柱が支えるアーキトレーヴ上に一体ずつ立っている。向かって左端の《泉》は、左胸の下の位置に両手で水瓶を持ち上げ、傾けて水を注ぐ姿で表される。左から二番目の《薬》は右手に小鉢をもち、左手で花のついた薬草を携えている。三番目の《衛生》は両手で銘帯をもつが、そこには何も記されていない。右端の《豊饒の姿をとる健康》は、花や果実の入った籐の籠を両手で支え持ち、頭髪にも果実が見て取れる。

テルニ大聖堂広場では、中部イタリアの主にウンブリア州を流れる二つの河の擬人像をあしらった噴水群像《ネーラ河とヴェリーノ河》が、浅い壁龕に沿って設置された半円状の水盤（奥行き約 110cm、横幅約 170cm）に置かれている。

《ヴェリーノ河》は右腕で水甕を支え、下方の《ネーラ河》のもつ鉢に水を注いでいる。段差をもつ岩塊の上に腰を下ろす《ネーラ河》は、右手で鉢を差し出し、《ヴェリーノ河》から水を受けるとともに、左膝の上に水甕を置き、左手で支えている。二つの丸彫り像は半裸で、《ヴェリーノ河》は背に外衣を羽織り、左膝と股間も布に覆われている。《ネーラ河》は右膝から股間にかけて布で覆われている。背後には林が表されている。

この噴水群像と広場を隔てて反対側に聳えるテルニ大聖堂は、1917 年の中部イタリア地震で大きな損傷を被った後、1935 年から 37 年にかけて、ガエタノ・コッポリの計画案に基づいて修復された。ファサード突出部の上方にはテラスが新設され、前述した《ネーラ河とヴェリーノ河》と平行してヴィーニが制作したテルニやウンブリア州に関わるトラヴァーティン製の聖人像計八体が、テラスの前方に設置された。

1934 年 4 月 12 日の記事によれば、資金不足のため予定の八体のうちひとまず四点のみが制作された。切妻の頂点にあった十字架と置き換わる予定であった聖母像も習作は完成していたと伝えられるが、こちらは実際に制作されることはなかった。同年 4 月 27 日の記事によれば、4 月 22 日に《聖ガブリエーレ・デッラッドロラータ》、《聖女アガペ》、《聖ウァレンティヌス》、《聖アナスタシウス》の四点がまず除幕された。残りの四体は遅れて 1937 年までに設置されたと思われる。

《アッシジの聖フランチェスコ》は左手で巨大な十字架を抱え、右手を胸に置き、両手の甲には聖痕が認められる。フランチェスコ会の修道衣をまとい、腰紐には同修道衣の特徴である三つの結び目が認められ

る。ウンブリア州アッシジの出身である。
《聖ペレグリヌス》は司教帽を被り、両手で三階建てのバシリカ式聖堂の模型を抱え、足下には殉教聖人を示す棕櫚の枝が置かれる。聖堂の模型は、テルニの最初の霊的指導者として与えられたものであろう。テルニの司教職確立以前の「原司教」とされるペレグリヌスは、142 年に斬首刑に処されたと伝えられる。
《聖女アガペ》は左足で宝物箱を踏み、右足下に棕櫚の葉を置き、合掌して左上方を向き、天を見つめている。左足で宝物箱を踏みつける動作は、世俗の財産に執着しない態度を示し、聖女が財産をすべて売り払って貧者に与えたと伝えるヤコビッリの記述を想起させる。テルニの殉教処女聖人で、テルニ初代司教ウァレンティヌスの弟子。273 年に斬首刑に処されたという。
《聖ウァレンティヌス》は司教帽を被り、右上方を見上げている。右手で殉教聖人を示す棕櫚の枝をもち、左手を帯の位置に置いている。初代テルニ司教で、270 年に斬首刑に処されたという。同地の主要な守護聖人として知られる。
《聖アナスタシウス》はちょうど隣の《聖ウァレンティヌス》を逆にしたような体勢をとるが、殉教聖人ではないため棕櫚はもたない。司教帽を被り、右手を胸に置き、左手で衣服の裾を持ち上げている。第三代テルニ司教で、プロクロスの後任である。
《聖女ドンニーナ》は、右手に殉教の棕櫚をもち、左手を胸に置いて天を見つめている。殉教聖女らしい図像だが、右脚の後ろに車輪が置かれている理由ははっきりしない。ヤコビッリは聖女の殉教について斬首刑を、『聖人行伝』は火刑を挙げるものの、車輪には言及しない。アガペの親族でテルニの殉教処女聖人として知られるドンニーナは、第二代テルニ司教プロクロスの弟子で、546 年に斬首刑に処されたという。
《聖プロクロス》は司教帽を被り、左手で殉教の棕櫚をもち、握手を求めるように上に向けた右掌を前方に差し出し、想像上の対話相手を見下ろしている。第二代テルニ司教でウァレンティヌスの後任。543 年に皮を剝がされた後、斬首刑に処されたという。
《聖ガブリエーレ・デッラッドロラータ》、俗名フランチェスコ・ポッセンティは 1838 年にアッシジで生まれ、ウンブリア州スポレートで育ち、イエズス会の神学校に通った後、1856 年、18 歳のときモッロヴァッレで御受難修道会修練士となり、同年 9 月 21 日に「ガブリエーレ・デッラッドロラータ」（悲しみの聖母のガブリエル）の名で聖職衣を得た。1858 年にピエヴェトリーナに隠棲して哲学を研究、翌年アブルッツォ州イーゾラ・デル・グラン・サッソに移住して研究を続けた。1862 年、わずか 24 歳で結核のため同地で没した。1908 年に列福、1920 年に列聖された。聖人は両手で書物を胸の位置に支え持ち、体軀に斜めの角度で読んでいる。また右足の前には髑髏が置かれている。書物は聖人の学究を、髑髏はその早すぎる死を示すものであろう。
本稿ではモンテカティーニ・テルメの四体の擬人像と、テルニ大聖堂ファサード上の八体の聖人像を図像的に検討し、現存する習作とともに公刊した。前者はリベロ・アンドレオッティ風のエトルスク的造形表現の影響を受けながら成立させた、古典的志向の強い作風の一形態とみなされる。また後者はテルニ及びウンブリア州に因んだ八人の聖人像を表し、アンドレオッティの影響を脱しモニュメンタルな作風を追究し始めた時期の作例と考えられる。
本稿ではまた、モンテカティーニ・テルメの四体の擬人像のうち、《泉》と《健康》のジェッソ習作、またテルニの八体の聖人像のうち四点《聖女アガペ》《聖ウァレンティヌス》《聖アナスタシウス》《聖ガブリエーレ・デッラッドロラータ》のジェッソ習作を初めて公刊するとともに、完成作で放棄された構想についても検討した。またテルニに関しては当初の《被昇天の聖母》の計画や、先に四体が先行して設置された経緯についても概観した（以上、雑誌論文②）。
（2）ヴィーニの生涯と批評史を概観した本文に続いて、ヴィーニの公共彫刻を年代順に列挙し、作品の所在地・素材・寸法・主題の記述等を示した全作品カタログを配し、詳細な図版を付した。カタログの内容は以下の通りである。
作品 1《ジェニー・デメトリアルキ・ラヴァロッティの肖像》、フィレンツェ、ポルテ・サンテ墓地、1920 年。
作品 2《アッティリオ・ピアッツェージ墓碑》、フィレンツェ、ポルテ・サンテ墓地、1922 年。
作品 3《ヴェーラ・ジュスティ墓碑》、フィレンツェ、ポルテ・サンテ墓地、1923 年。
作品 4《ウェヌスの誕生》《オルフェウスの死》、ローマ、国鉄職工クラブ付属劇場旧蔵。
作品 5《ディアナと鹿》、ブロンズ、パレルモ、郵政電信庁舎、会議室、1926 年。
作品 6《ボルガレッロ家墓廟》装飾、ジェノヴァ、スタリエーノ墓地、1926 年。
作品 7《聖フランチェスコ》、所蔵先不明、1926 年。
作品 8《泉》《薬》《衛生》《健康》、モンテカティーニ・テルメ、テットゥッチョ浴場、1927 年。
作品 9 《カステルフランコ・ディ・ソット戦没者記念碑》、1927 年。
作品 10《ケレス》、ホテル・バリオーニ創設 25 周年記念メダル、個人蔵、1928 年。
作品 11《フィリッポ・キオッフィ墓碑》、フィレンツェ、トレスピアーノ墓地、1929

年。
作品 12《聖マルコの獅子》、ブレッシャ、アドリア海保険連合会館、1931 年。
作品 13《航空通信》《電気通信》《アジア》《アフリカ》《ヨーロッパ》《アメリカ》《オセアニア》《船舶通信》《陸上通信》《戦没郵政電信士記念碑》、ラグーサ、郵政電信庁舎、1932 年。
作品 14《キリスト磔刑》、所蔵先不明、1932 年。
作品 15《火力発電》《水力発電》《電力》、フィレンツェ、国立労働銀行、1933 年頃。
作品 16《キリストの道行き》全 14 点、ローマ、サン・ロベルト・ベッラルミーノ聖堂、1933 年以後。
作品 17《聖杯をもつ天使》《灯明をもつ二人の天使》《キリスト洗礼》、ローマ、クリスト・レ聖堂、1934 年以前。
作品 18《聖体顕示台用玉座をもつ二人の天使》、ローマ、サンティッポーリト聖堂旧蔵、1934 年以前。
作品 19《ヴィットーリオ・モンティリオ》、ローマ、ピンチョ公園、1934 年。
作品 20《われは主のはしため》、サバウディア、サンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂、1935 年。
作品 21《ディオスクロイ》《雄牛と闘う雌獅子》《馬と闘う獅子》《仔鹿と闘う雌獅子》、ローマ、ラ・サピエンツァ大学、1935 年。
作品 22《ネーラ河とヴェリーノ河》、テルニ、大聖堂広場、1935 年。
作品 23《アッシジの聖フランチェスコ》《聖ペレグリヌス》《聖女アガペ》《聖ウァレンティヌス》《聖アナスタシウス》《聖女ドンニーナ》《聖プロクロス》《聖ガブリエーレ・デッラッドロラータ》、テルニ、大聖堂、1934/1937 年。
作品 24《統帥讃歌》、ボルツァーノ、全国社会保障機構会館、1935-37 年。
作品 25《労働の情景》、ナポリ、全国保険機構会館、1933-38 年。
作品 26《アンドレア・バリオーニ墓碑》、フィレンツェ、トレスピアーノ墓地、1938 年。
作品 27《律法の板をもつ大天使》《天秤を持つ大天使》、ミラノ、裁判庁舎、1937-40 年。
作品 28《女性寓意像》、所蔵先不明、1940 年。
作品 29《帝国水道 5 月 5 日》、所蔵先不明、1940 年。
作品 30《聖家族》、ローマ、アウグスト・インペラトーレ広場、1941 年。
作品 31《騎馬群像》、ピアチェンツァ、全国保険機構会館、1942 年以前。
作品 32《教皇ピウス十二世》、ローマ、ヴァティカン歴史博物館 1942 年。
作品 33《受胎告知と七つの慈善行為》《聖母、聖ゲオルギウス、聖ロクス》、ボディオ・ロムナーゴ、サン・ジョルジョ聖堂、1943 年。
作品 34《聖ニコラス・フォン・フリューエ》、ローマ、サンテウジェニオ聖堂、1943/50 年。
作品 35　コッラード・ヴィーニ（トルヴァルセンの模刻）《洗礼を施す天使》、アイスランド、アークレイリ聖堂。
作品 36《聖母子と天使たち》、ヴェローナ、クオーレ・インマコラート・ディ・マリア聖堂。
作品 37 コッラード・ヴィーニ《聖母子》、フィレンツェ、パンザーニ通り（以上、雑誌論文①）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①甲斐教行「コッラード・ヴィーニの公共彫刻――全作品カタログ」、『五浦論叢』（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）、第 23 号、pp.(25)-(98), 2016 年、査読有。
②甲斐教行「コッラード・ヴィーニの公共彫刻――モンテカティーニ・テルメおよびテルニの作例について」、『五浦論叢』（茨城大学五浦美術文化研究所紀要）、第 22 号、pp.19-52, 2015 年、査読有。

６．研究組織
(1)研究代表者
甲斐　教行（KAI NORIYUKI）
茨城大学・教育学部・教授
研究者番号：６０３２３１９３

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし